

文房先生

~ bungousensei ~

第五話

中川善史

絵・かないてつお



文豪先生とろんろんは地蔵と別れて分教場目指して歩いていきます。

「お地蔵さんは民子さんに惚れちよるば〜い」

「先生、なんの歌だ、それは。それにどこの方言だ」

先生は相変わらず浮かれ、ろんろんがそれをたしなめています。

地蔵のところからだいぶ離れ、文豪先生が騒ぐのをやめると、周囲のさやかな音が急に耳に立ってきます。雨のあいだ息を止めてじつとしていた鳥たちが、ああでもなかったところでなくなかったとやかましく話し合いを始めます。

木々は雨ですっかり体中のほこり



を洗い落とし、おまけにがふがふと水をたっぷり飲んだので、改めてゆつくり昼寝をしようと伸びをします。

ざつくざつくちゅつちゅつと濡れた土を踏む二人の足音が続いています。

林が途切れるむこうに、分教場が見えてきます。二階建ての木造校舎です。中央に三角屋根の時計台があつて、その左右に鱗形のスレートの渋い赤の屋根が続いています。

建てられた当時は、かなり立派なものだったのです。ここが辺鄙な辺鄙な辺鄙な村でなければ、昔の近代建築の一作品として見に来る人も多かつたかもしれません。

「こんな村にこんな建築があるのも面白いな」

と、先生は分教場の赤屋根を見上げて言いました。ろんろんは頷くような顔かないような顔をして横を歩いています。

今でこそ分教場と呼ばれていますが、昔、まだこの村の人が多かった頃は、ここは中学校の校舎だったのです。立派だったので

村立中学校

村立中学校

村立小学校

「大」の字をつけて「村立大中学校」と呼ばれていました。

しかも、そこに小学校も併設されて「村立大中小学校」になりました。大中小ですから、立派なものです。これ以上になるには、特大とか特盛りとかスペシャルとか名付けるしかないでしょう。

ところが、それをピークに、だんだん、村の人が減ってきて、中学校が町に移ってしまい、「村立大小学校」と呼ばれるようになったのです。

以降も生徒は減り続け、いつのころからか、村の人は昔風に「分教場」と呼ぶようになりました。なんだか、そのほうがしつくりと

村立小学校

村立小学校
←分教場

きたのでしよう。

そして、生徒の数に比べて、校舎が大きすぎるので、いまでは、ここに村役場も移ってきています。ですから、本来は、村役場と呼ぶべきなのかも知れませんが、分教場の方が通じるのです。

木造校舎の前は、大きな運動場になっています。校舎を囲う塀はありません。運動場がそのまま道に面しています。「村役場前」というバスの停留所があるあたりが、だいたい、運動場のおしまい、という感じです。

ですから、「村役場に行くには、分教場前にある村役場前でバスを降り、分教場に行けば村役場に行ける」、と村人は考えているようです。

文豪先生は、初めて村に来た時、ステッキにカバン一つという姿で、ここの停留所に降り立ったのでした。

よくわからないままに、村役場を訪れると、頭の大きい背の低い男が出てきて、いろいろと





世話を焼いてくれ、手続きも済ませて、あれよあれよといううちに、今の家に落ち着くことになったのでした。

中央の時計台の向かって右側が村役場で、左側が分教場と別れています。そして、二階のどこかに、民子のいる部屋があるのでしよう。

文豪先生が、ふと時計台の尖った屋根を見上げると、小さな子供がてっぺんに座っています。

「あぶないな」

子供の着ているものが変わっていて、子供の肌着のシュミーズのような形で、レースのような絹のようなふわふわする生地できているようです。

頭髪は金色の糸のよう、肌も抜けるよう

に白いのです。なんだか、この辺の子のようには見えません。先生は、お菓子の箱に描いてある天使を思い出しました。

分教場の方の一角から、からんからん、という音が響いてきました。

そちらの方を見ると、上級生らしい女の子が分教場から出てきて、手にしたベルを鳴らして、

「お昼ご飯ができたよ」

と、呼びながら校庭を横切つてきます。この子は、普通にブラウスとズボンを着ています。



その時、時計台の上の子供が、ふわっと空中に舞いました。その浮かぶ姿を見て、先生は本当の天使を見ているのかと思いました。

しかし、次の瞬間、子供の姿は空中にはなく、びたーん、と音が聞こえそうな勢いで、顔面から地面に落ちていました。

「いかん」

文豪先生はあわてて、そのうつぶせになって倒れている子供に走り寄りました。

「君、大丈夫か」

文豪先生の肩越しにろろんも覗き込んでいます。

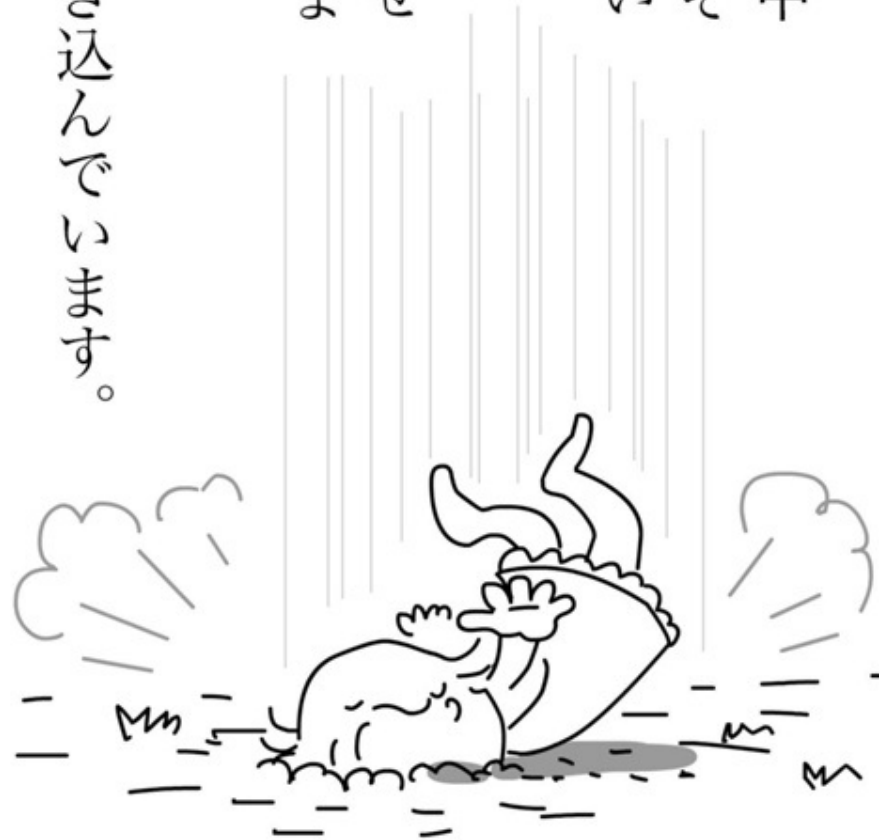
「安寿なら大丈夫だよ」

後ろから、落ち着いた声がしました。さっきのベルを鳴らしていた女の子の声です。

「だ、大丈夫なもんか、顔面から落っこちたんだぞ」

「でも、大丈夫だよ」

すると、その声に答えるかのように、安寿と呼ばれた金髪の子供



はむつくりと起きあがり、その服をぱつぱつと手ではたきました。朝からの雨で水を含んでい
る土だのに、それはまるで金砂のようにさらりと落ちて、まるできれいになってしまいました。

女の子は平然とした顔で、

「毎日のことだから」

「毎日?・・・来る日も来る日もああやつ

て屋根から落つこちているのか」

「うん。あれが安寿の降り方、

いや落ち方」

「よく顔がぶつ壊れないな」

「うん。安寿は、もともと空のもつと高いところから落ちてきたん

だもの。あれくらい、全然、平気だよ。でも、もう少しうまく落ち

ればいいような気がするけどね」

分教場の方へ歩いていく安寿の背中には、子供の手のひらくらいの羽が生えていました。





文豪先生もろろんは、なんということなしに、女の子と安寿のあとについて分教場の方へ歩いて行きます。すると、女の子が振り向いて、

「おじさん、なんの用で来たの？ 村役場なら、あっちだよ」

と、校舎の反対側を指さします。

「あ、でも」

と、今度は分教場の方を指さして、

「昼ご飯の時は、こっちだけねどね」

昼ご飯は、村役場に勤める人も一緒に集まって分教場の方で食べるので、昼時用事のある村人はそちらの方へ行くのだそうです。

つまり、さっきの村人風に言うと、

「村役場に行くには、分教場前にある村役場前でバスを降り、分教場に行けば村役場に行くけど、昼時は村役場じゃなくて分教場に

行けば村役場に行ける」ということになります。

「あ、わかった」

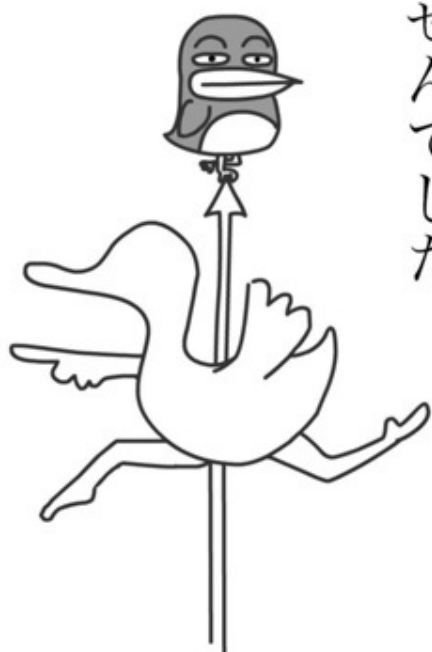
と、女の子はにたつと笑いました。

「おじさんたち、昼飯が食べたくて来たんでしょ」
「ちがう」

と文豪先生は言いましたが、覆い被せるように大きな声で、ろんろんが、

「うん！ 食べたい！ あー、いい匂いがしてくる。わー、お腹空いたー」

と言ったので、先生の声はまるで聞こえませんでした。



女の子は分教場の教室のドアを開けながら

「先生、お昼ご飯をねだりに来たおじさんがいます」

教室の中にいた人々の目がいつせいに、お昼ご飯をねだりに来たおじさんの方に向けられました。

「い、いや、ちがう、その・・・」

と、お昼ご飯をねだりに来たおじさんは、入り口の敷居に突っ立って口ごもり、咳払いなどしています。

「あのおじさん、お昼ご飯をねだりに来たんだって」「だれ？知っている？」「校庭で声を掛けたらついて来ちゃったんだって」

子供達の声がします。

「い、いや、そういうわけではない・・・」

と、校庭で声を掛けたらついて来ちゃったお昼ご飯をねだりに来たおじさんは説明しようとしたが、うまく言葉が出てきません。

その時、



「あ、あなたは」

と、教室の隅の方から男の声がありました。

「あなたは、山田文豪先生……」

声の方を見ると、背が低くて頭が大きくて額が禿げ上がって口の大きな二頭身くらいにしか見えない男が立ち上がってきました。文豪先生が初めてこの村にやってきた時、いろいろ世話をしてくれた村役場の人というのが、この男なのでした。

「ああ、あの節はお世話になりましたな。ええと、あなたは……」

「私は川村と申しまして、村の助役をしています」

「ほう、じゃあ、私は助役さんに家を案内していただいたのか」

「いえ、村役場には人が少ないので、なんでもやるのです」

「そうでしたか……」

「文豪先生、よく来てくださいました。お昼ご飯をねだりに」

「ちがいます」

そこへ、ろんろんが口をはさみます。

「ねえ、お昼ご飯をねだりに来たおじさん」

「お前まで言うな」

「民子さんはどこかな」

「民子さん・・・ああ、夏目君ですか。どこか外ですか。あ、あそこにいる」

と川村助役が指さす方を見ると、校庭の端の方に民子の姿が見えました。

「携帯で電話をかけている。ときどき、ああやって休み時間にはひとりで電話をかけているようです。誰か、都会の友達とでも話をしているのでしょうか。まあ、ひとりでこの村へ来て、さびしいこともあるんじゃない」

その時、教室の後ろのドアが勢いよく開いて、

「さあ、おいしいキノコ汁だぞう」

と青年が大きな鍋を持って入ってきました。鍋の中には、

いっぱいの色んな種類のキノコや芋やニンジンやいろいろな野菜がふつふつと煮えて、いい匂いをあげています。

助役はにこにこ笑って、

「さあ、文豪先生、あなたのお目当て



が来ましたぞ」

「ちがいます」

青年のあとから、背のすらりと高い美しい女が続いて入ってきました。なにか、その人の周りだけ空気が違って、いるようで、つけていたエプロンをはさず物腰さえ優雅です。

助役は慌てたようにその女性の方に走っていき、文豪先生のそばへ案内してきました。

「文豪先生、ご紹介します。こちら、村長の白井竜子です」

「あなたが、村長さん……」

白井村長は、うっとりするような微笑みを浮かべて会釈をしました。

助役は、今度は村長に向かって文豪先生を紹介します。

「村長、こちらがお昼ご飯目当てにいらした



山田文豪先生とろんろんちゃんです」

「助役、ちがいます」

「どうぞ、お召し上がりください。」

分教場のお昼はいつでも先生を歓迎いたします」

と、村長は、にこやかに言います。

「いえ、あ、あの」

「先生、よかったな。毎日、一食助かるぞ」

と、大声でろんろん。

「いやあ、先生のような方を一食お助けできるとは、

村としても光栄ですな。いつでもねだりに来ててください」

と負けずに大声で助役。

「あのおじさん、これから毎日食べに来るのかな」

「すごいおじさん」「いい根性してるよね」と、

子供達のささやきあう声。

先生は、じつと天井を見つめていました。

普通の人であれば、そこでいたたまれなく

なって逃げ出すのでしようが、そうはせず、ちゃんと座って黙々と



食べ、おかわりまでしたのが、先生の偉いところでありましょう。

夏目民子は、みんなが食べ終わる頃になって、なんだか浮かない顔つきでやって来ました。

文豪先生とろんろんを見ると、少し驚いた顔をしましたが、やって来て挨拶をしました。

「地藏に代わって、菅笠の礼を言いに来たんだ」

と、文豪先生が言うのと、民子は、

「何かお地藏様のところに簡単でも屋根のついたものがあるといいですよね」

と、言いました。ですが、また用事ができたらしく、向こうへ行ってしまうました。

「少し授業を見学されたらどうですか」

と、さつき大鍋を持って入ってきた青年が、勧めてくれました。青年は、背が高く、やはり長い髪を頭の後ろで結んでいます。

授業が始まると、子供達は青年を中心に半円形に机を並べて席に着きました。その後ろに、文豪先生とろんろんの席が用意されました。

お昼に校庭でベルを鳴らしていた女の子が一番年かきで、六年生のみどりちゃんといひます。

その次が、五年生の幸太といういがぐり頭の男の子で、その下は三年生のゆずちゃんという女の子です。

その下に二年生の女の子、この子はお多福顔で、

十二単衣のような着物を着て、長く伸びた髪はきれいな桃色の紐で結んでいます。なぜか、その後ろに

着物を着た白髪のおばあさんがくつついていました。

まわりからは、「玉虫ちゃん」と呼ばれ、

おばあさんからは「姫」と呼ばれていました。

一番下の一年生が、例の安寿、時計台

から落つこちた金髪の子です。

「じゃあ、今日は漢字の書き取りのテストをしまーす」

と青年が言つて、黒板にさらさらと問題を書きだ

しました。黒板は、三面並んでいて、そこに学年ごと

の問題を書いていき、生徒達は手元に配られた紙に

回答を書いていきます。



問題を書き終わると、青年がにこにこ笑いながら文豪先生の前にも紙を一枚持ってきました。

「これは？」

と、文豪先生が言うと

「先生も六年生の問題に挑戦してください」「まさか。私だって、文士の端くれだ。」

今さら、小学生の漢字なんて」

と先生はふんぞり返ってみせました。

砂府青年は、「でも、パソコンで書き慣れると、漢字の書き方を忘れるじゃないですか」

「私は、パソコンは使いません。原稿用紙は東京・神田の店で買う。万年筆はウォーターマン、インクはブルーブラック」

と一息に言い切ると、口をへんの字に曲げます。

「へえ、それは、かつこいいですね」

「この分教場の生徒は、この五人ですか」



と、先生はテストから話題をそらしました。

「はい。一番上の六年生のみどりちゃんは、来年の春になったら、中学に行くために町の親戚の家に預けられるんですけどね」

「あの子のおかげで、私はお昼ご飯をねだっているおじさんになってしまった」

先生、相変わらず無然とした表情です。

「ははは。しつかりしている子ですよ」

「それはそうと、あの金髪の子」

「ああ、安寿ですか」

「さつき、時計台の上から落ちていた。危ないんじゃないか？ 今もテストだというのに、ぼんやりした様子だし、どこか打ったんじゃないか」

「それが、毎日こうだし、毎日、平気なんですよね」

「みどりちゃん、安寿がもつと高いところから落ちてきた、と言っていたが」

「うーん」

と、青年は宙を見上げて腕を組み、

「あの子は、森の道にあの格好で倒れているところを見つげられたんですよ。どこから来たのか、身よりも頼りもわからないんです。ただ、本人が言うには、高いお空の雲を踏み外して落ちてきた、というんです」

「背中に羽のようなものが生えてますな」

「ええ」

「まるで、絵本の天使だ」

「そう。エンジェルをもじって、安寿という名前を付けてあげました。助役の川村さんが引き

取って世話をしています」

「毎日、時計台に登るのですか」

「はい。まあ、村長は、自分のふるさとと天空を恋しがって高いところに登りたがるのかも

知れない、というんです。・・・ああ、村長の

白井女史は分教場の校長も兼ねているんです」

「ほう。助役さんも、ひとりいろいろなさつていると言ったが」



「みんな、いろいろやってます。僕も、実は分教場の臨時講師兼村役場の臨時職員なんですよ。砂府と言います・・・あ、そろそろ時間だ」

と、青年は立ち上がり、

「はい、テストはここまで。じゃあ、早速採点するから、紙を広げておいて」

と、片端から丸やらバツやらをつけていきます。

「あゝあ。安寿、また、なにも書いていない」

安寿の方は、にこにこ笑って砂府青年を見えています。

「また、ぼんやりしていたんでしょ」

「えへへー」

「あ、もう一人、零点の人がいます」

「え、もうひとり？」 「誰だろう」

と、生徒達がこそこそささやきあうのを聞くと、砂府青年はにやりと笑って、

「山田文豪先生です」

「な、なに？」

「しゃべってばかりいて、一問も書いていないでしょ。追試受けてくださいね」

さて、文豪先生は追試を受けなければならぬのか。追試で、何点取れるのか。てか、そんなことが、この物語の主要ストーリーなのか。次回に続きます。

(つづく)

山田文豪



文豪先生 第五話

<http://p.booklog.jp/book/32364>

文：中川善史

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/kanaitetsuo/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/32364>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/32364>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier (<http://p.booklog.jp/>)

運営会社：株式会社paperboy&co.